ミッドランドスクエア MS ものがたり

未経験の高さ247メートル

腕利き職人ら奮闘

旧毎日名古屋会館（毎日ビル）と旧豊田ビルが解体され、ミッドランドスクエアの建設工事が始まったのは04年1月のことだった。大規模工事としては極めて短い32・5カ月という工期で、工事をスケジュール通り進めるため、地元名古屋だけでなく東京、大阪からさまざまな分野の職人が集まり、ピーク時には一日約1500人が働いた。経験豊富なベテランでも、地上47階・高さ247㍍という超高層ビルでの仕事は経験がなかった。

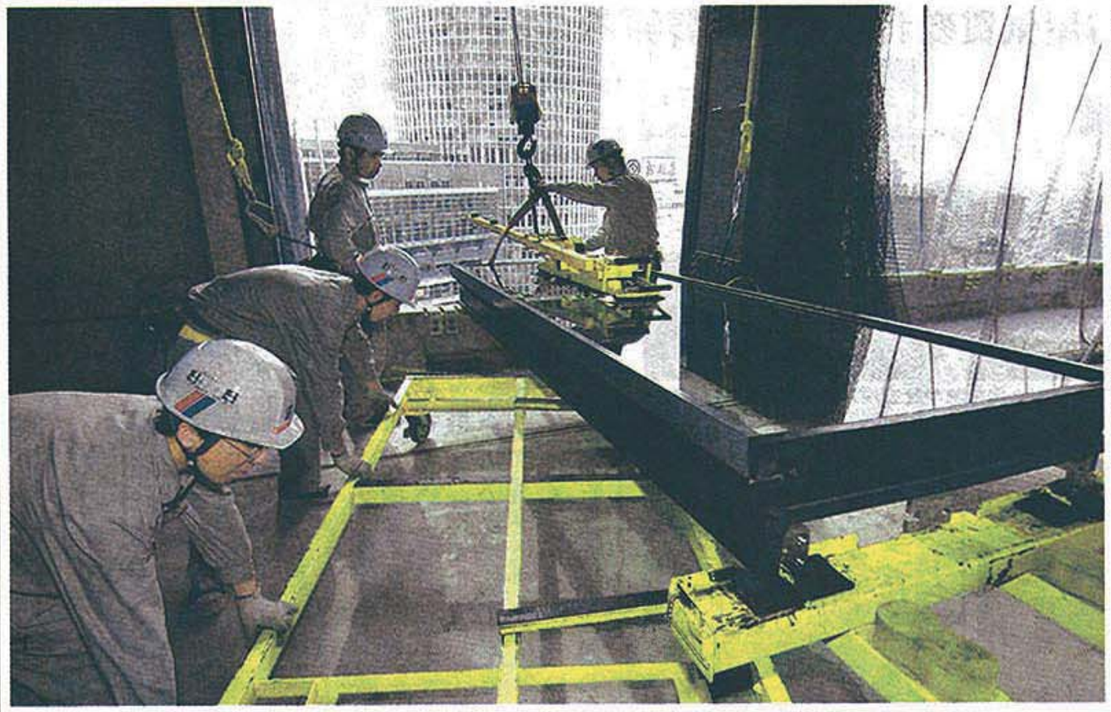
鳶職で関都建設（東京都）の高橋保夫(38)は、東京の品川イーストワンタワー（32階）、渋谷マークシティ（25階）での実績を買われて参加。ミッドランド高層棟1～47階の鉄骨組み立てを担当した。現場の仮囲いから始まり、手すりの設置、消防階段やクレーン、鉄骨、仮設エレベーターの組み立てなど、高橋は「鳶の仕事は建物全体の安全の要」と力説する。

予期せぬトラブルもあった。油圧で振動を吸収する耐震用の「アウトリガーオイルダンパー」を7階に取り付けた時のこと。垂直の二つの柱の間を「V」の字型のダンパーで結ぶ際、ダンパーの重みで柱が内側に寄ってしまった。ダンパーは二つに分解したものを階上に運び、一つに組み立ててから取り付ける予定だったが、バラバラに付けたのがあだとなった。油圧ジョッキで柱を広げ、なんとか完了。7、26、42階に取り付けたダンパーの総重量は35トンにもなった。

「ダンパーの取り付けは一番しんどかった」。20歳でこの世界に入った高橋でも、そう振り返る。

高橋らの鉄筋組み上げに続いて進められたのが、各フロアの床コンクリート工事だ。左官業「オオタ」（愛知県一宮市）の太田正夫(32)は高層棟の床の仕上げを担当した。

ビルの最頂部、47階のヘリポートの床に取りかかったのは今年1月。現場の気温は氷点下10度まで下がった。手がかじかむ寒さで、コンクリートはなかなか乾かない。「夏だと2時間でできるのに、打ち終わってから固まるまで12時間。作業が夜中になることもあった」という。それでも太田は「何とも言えない達成感があった。ナゴヤドームなど、これまで自分が手がけた建物がものすごく小さく見えた」と言う。



暑さ、寒さ、強風……。ミッドランドスクエア建設現場での職人たちの作業は困難を極めた

建設工事は天気との闘いの連続だった。「福岡電気」（同県長久手町）の吉田和正(40)は9、22階の電気設備を担当した。9階の作業は、昨年の猛暑の時期だった。窓ガラスは開かずエアコンもないうえ、風が吹き抜けない現場の気温は40度を超えた。ぬかるんだ地面での作業だった愛知万博・地球市民村の建設など、悪条件の現場は経験済みだが、この暑さはこたえた。作業服はすぐに汗でぐっしょりになり、一日に3枚の着替えを持参した。「暴風機を置いたり、500㍉㍑のペットボトルを常時3本は持っていた。暑かったなあ」と吉田。

「作業で最も怖いのは、強風と台風だね」。高橋は言う。本体工事の仕上げとなる外装のカーテンウオールを担当した「藤原鋼業所」（大阪市）の氷野明(40)も、強風の危険を感じながら作業した。大阪出身の氷野はシンガポール・チャンギ空港や関西国際空港など大プロジェクトを手がけてきたが、これほどの高層ビルは初めて。単身赴任生活は昨年2月から1年に及び、過去最長になった。

名古屋テレビ塔からの電波障害を避けるため、ミッドランドのガラス面の接着には金属ではなく樹脂枠が使われている。樹脂枠は金属に比べて強度が弱いため、ガラス面に吸盤をはりつけての作業。水にぬれると吸盤の吸着力が落ちるので、雨の日は作業はできない。さらに、10㍍以上の強風でも作業はストップした。

外装に使われたカーテンウオール（長さ約3㍍、幅約1㍍）のユニット枚数は7000枚以上。フロアに置かれたクレーンでつり上げて張り付ける。一日平均40枚を張り付け、1フロアの仕上げに4日、47階まで完成させるのに11カ月かかった。

氷野が「一番の見せ場だった」と胸を張る44～46階のスカイプロムナードの作業も、風に悩まされた。北西からは名古屋特有の「伊吹おろし」が吹きつけてくる。風が収まるまでクレーンは何度も止まった。氷野は「風が冷たい。大阪の寒さとは全く違う」と話す。

外装の氷野明

電気設備の吉田和正

左官の太田正夫

鳶職の高橋保夫

太田、高橋らには、作業のほかにもう一つ大きな仕事があった。現場では各社の職人グループを束ねるリーダー（職長）会が組織され、太田が会長、高橋は副会長を務めた。工事をスムーズに進めるため、約100人のリーダーが中心になり、トイレ掃除や休憩所、ロッカーの設置、ごみの分別などの作業を分担。毎日の朝礼では、太田らが事故防止のために危険ポイントを職人に指示した。

「掃除ができてない」「設計図面の通りに工事ができない」――。トラブルが発生すると、太田は各現場を飛び回った。携帯電話は夜中にも遠慮なく鳴り、一日の着信が100件を超えることもあった。日曜日以外は出勤し、帰宅は午後11時ごろ。朝は5時過ぎには起きて、仕事に向かう生活で「家には寝に帰るだけでしたよ」と苦笑する。

忙しい太田を、ムードメーカーの高橋がフォローした。「笑いのある現場にけがはない」が高橋のモットー。作業員の労をねぎらうため、正月やお盆の節目には、もちつき大会などさまざまなレクリエーションを企画。休日にはゴルフコンペも開いた。

「コミュニケーションを取って面白くやらないと、仕事もうまくいかないもんだよ」と高橋は言う。氷野は「大阪でもあまり経験のない、明るい雰囲気の現場やったなあ」と振り返る。

高層棟の完成を目前に控えた9月22日、リーダー会の解散式が名古屋市内のホテルで開かれた。約130人が出席し、お互いの労をねぎらった。「またこのメンバーで仕事ができたらええなあ。家族にもこのビルを見せたい」。氷野はしみじみ話す。かつての仲間のうち、太田、吉田はミッドランドで現在も作業を続け、氷野は和歌山、高橋は東京と、既に次の現場で黙々と汗を流している。

（敬称略）

【影山哲也】